

悠久の河

6

祖父との別れ

「神さまの山だと言われどる剣山を削り取るな
んて、普請の時から嫌な予感がしどった」
村人たちは、ここ二年程の幸せだった日々の
ことばかりが心に浮かび、その前が、どんなに
酷い状態だったのかさえ、思い出す余裕が無か
った。

家正の川普請が竜神さまの怒りを買ったとい
う噂が、まことしやかに村中に広まったのは、
このころからだった。

「川幅をもつと広げたら、災害はきっと防げる。
みんなで力を合わせんか、このままでは、昔と
同じことになってしまふぞ」

そう叫ぶ家正の声に耳を傾け、手を貸そうと
する者はいなかつた。

さらに、松江藩に願い出た災害復旧工事の返
答も無いまま、月日は過ぎて行つた。

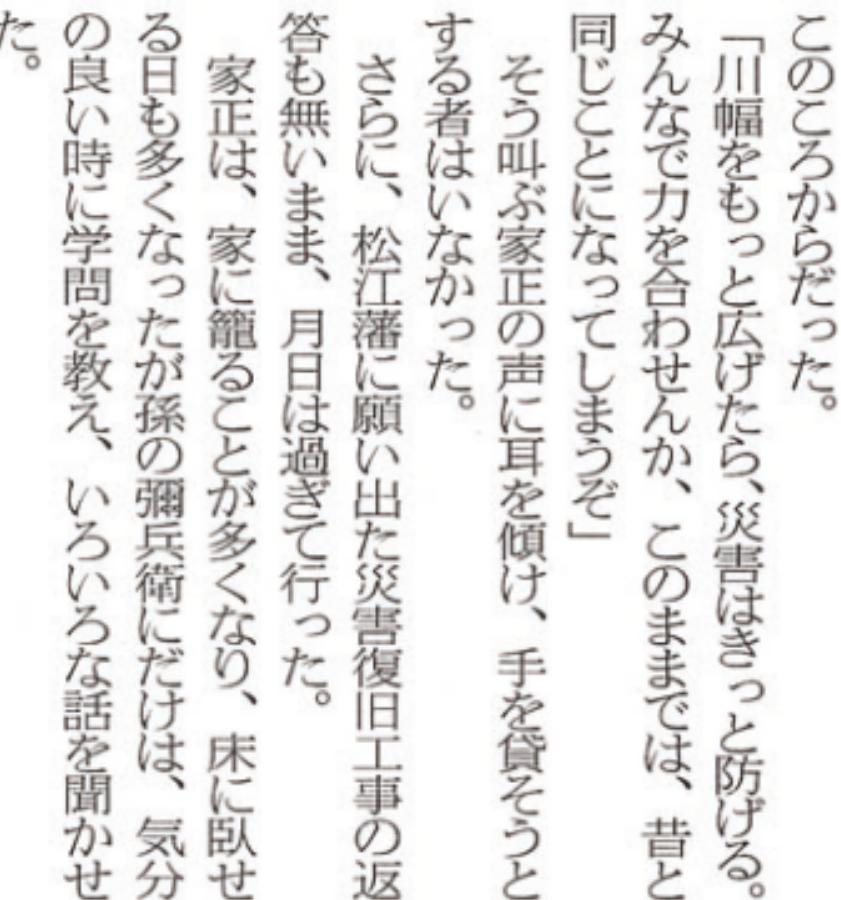
家正は、家に籠ることが多くなり、床に臥せ
かりと学ばんといかん。村の人も、きっと解つ
てくれる日が来る。わしが無駄なことをしたの
では無いということがな。最初の一歩が有るか
らおうと思うなよ。のう、彌兵衛、子の代で、
孫の代で、ここに住んでいて良かつたと思つて
もらえる村を作らなくてはいかん。解るか、彌
兵衛」

「ちっとも、わからん
「そとか、アハハハ、わからんか」

家正は笑つた。

「おじいさまの悪口を言う村のやつらなんか大
嫌いだ。おじいさまを助けようとしない村のや
つらも大嫌いだ」
「おう、おう。わしをかばってくれる者がいて、
わしも幸せ者よのお。ハッハッハ」

明暦三年（一六五七年）二月、災害から三年
目の早春、家正は復旧工事の許可が藩から下り
ないまま、失意の一生を終えた。彌兵衛、六歳
の年であった。
家正が世を去つてから、九年後には、藩主の
松平直政が世を去つた。
日吉村の人々は再び、雨期になる度に水害に
怯えて暮らす生活を強いられていた。田畠は水
害の度に荒れ果て、復旧作業の終わらぬ間に、
また次の水害が襲つた。



村尾 靖子

画 高田勲

周藤彌兵衛翁物語